

普通体基調会話における日本語学習者の 丁寧体使用に関する一考察

奥 西 麻衣子*

1. はじめに

日本語には、丁寧体・普通体という2つのスピーチスタイルがあるが、日本語の会話教材では、丁寧体はフォーマルな場、普通体は友人間・家族間などのカジュアルな場で用いるという説明がなされることが多い。しかし、実際は、次の例のように同一相手との会話で常に同じスタイルが使われるわけではない。

【会話例1】*本調査のデータから抜粋

01A：覚えられるよ。

02B：覚えられないよー。

→03A：覚えられますって [――]。

04B： [hhh]

上記の例は、友人同士の会話である。会話の参加者は互いに普通体をベースにして話しているが、3行目で丁寧体に切り替わっている。このような普通体をベースとした普通体基調の会話で、丁寧体へ一時的にシフトする現象は「アップシフト」と呼ばれ、話者が冗談を言うとき（大津, 2007；Cook, 2008）、話題を転換するとき（三牧, 1993；劉, 2013）などに用いられ、会話に様々な表現効果をもたらすとされている。

しかし、日本語の教室においては、一般的に丁寧体は「フォーマル」な場面で用い、「丁寧さ」を示すときに用いられると教えられる傾向があり、

丁寧度の度合い以外に多様な意味を持つことが明示的な形で提示されることは多くない（Cook, 2016）。そのため、アップシフトのコミュニケーション上の効果は、学習者に習得されにくいと考えられるが、実際はどうだろうか。また、先行研究では、母語話者には見られない学習者特有のアップシフトがあることも報告されている（上仲, 2007）。学習者特有のアップシフトがあるとすれば、それにはどのような特徴があるのだろうか。これらの点を明らかにするため、本発表では、普通体基調の接触場面会話をデータとして、日本語学習者にどのようなアップシフトが見られるか、その特徴を探り、考察する。

2. 先行研究

2.1 アップシフトの機能

友人同士や家族間などの普通体基調の会話データをもとに、アップシフトによって生じる機能や効果を検証したものには以下の先行研究があり、これらは、大きく分けて対人機能と談話展開機能に分けられる。

<対人機能>

- ・冗談を言うとき（大津, 2007；Cook, 2008）
- ・意見や立場の提示（劉, 2013）
- ・相手のスタイルへの同調（三牧, 1993）

<談話展開機能>

- ・話題転換（三牧, 1993；劉, 2013）
- ・会話開始・終了の合図（劉, 2013）

*お茶の水女子大学大学院生

・重要部分の明示・強調（三牧，1993）

なお、これらは「シフト可能なポイント」であり、必ずしも当該箇所ですフトが起こるということではないことを付記しておく。

2. 2. 普通体基調の会話における日本語学習者のアップシフトについて

これまで、学習者のスピーチスタイル研究では、丁寧体から普通体へのダウンシフト現象についての研究がほとんどで、普通体基調の会話データをもとに、学習者のアップシフトに焦点を当てた研究は、中国人留学生と日本人の友人との会話を分析した上仲（2007）、留学生16名とその知人・友人との会話を扱った高橋ほか（2017）、中国人留学生1名とその友人との会話を扱った陳・川口（2013）があるのみである。

これらの先行研究で学習者のアップシフトについて指摘されている点として、1) 母語場面会話に比べ、アップシフトの頻度が高いこと、2) 冗談、相手のスタイルへの同調、話題転換など、母語場面に見られるものと同様の機能が見られたこと、一方で、3) 母語場面には見られない学習者特有のアップシフトがあったことが報告されている。

この学習者特有のアップシフトには、日本語能力の不足により、スタイルの管理維持ができないことが挙げられている。また、これと異なる考察として、陳・川口（2013：80）では、友人であっても、相手が日本語母語話者である場合に、「丁寧に話さなければならぬ」という言語外的要因としての学習者独自のルールが働いた可能性も指摘されている。

2. 3 残された課題

これらの研究は非常に示唆に富むものであるが、学習者のアップシフトを扱った研究蓄積はまだ少なく、また記述的な分析にとどまっているものが

多い。学習者のアップシフトには、母語話者にも見られる規範的な使用（＝無標アップシフト）と、そうでない学習者特有のもの（＝有標アップシフト）があるとされるが、それぞれどの程度見られるか、数量的な観点からの分析は十分になされていない。学習者のアップシフトの実態を捉えるためには、アップシフトがどの程度起き、どのようなアップシフトがどの程度生起するかについて、つまり、量的な側面と、会話データを仔細に観察する質的な側面の両面から捉える必要がある。また、これまでの研究は中国語母語話者を対象としており、それ以外の学習者にも同様のことが言えるのか、検証の余地がある。

3. 目的と研究課題

本研究では、「普通体を使用している話者が丁寧体を一時的に使用する現象」（千々岩，2016：115）をアップシフトと定義し、学習者の発話に見られるアップシフトにどのような特徴が見られるかを明らかにするため、次の研究課題を設定した。

RQ 1. 普通体基調の会話において、学習者のアップシフトはどの程度起きていますか

RQ 2. 規範的なアップシフト（無標アップシフト）と学習者特有のアップシフト（有標アップシフト）は、それぞれどの程度あるか

4. 研究方法

対象者は、中上級レベルのマレーシア人留学生4名である。滞日歴は、調査時点で2ヶ月～3ヶ月であった。収集データは、留学生と日本語母語話者との雑談20分、4組の音声データで、対話者の日本語母語話者は、留学生と同じ大学に通う友人で同性・同年齢である。本発表ではこの音声データの文字化資料4本を分析データとした。

分析手順として、まず、学習者の発話を丁寧

体・普通体・その他に分類した。今回対象とした4本の会話データは、学習者・母語話者ともに発話全体を通して普通体の分布が50%以上を占め、「最も多い分布」(三牧, 2013: 86)であったため、普通体基調会話と認定した。

RQ1では、この普通体基調の会話に現れた丁寧体を、アップシフトとし、その生起頻度を算出し、母語話者の結果と比較を行った。次に、RQ2では、学習者の丁寧体発話を質的に見ていき、先行研究で挙げられている対人機能・談話機能に該当するものを無標アップシフト、該当しないものを有標アップシフトとし、それぞれの比率を算出した。そして、現れた有標アップシフトの要因を調べるため、それらの丁寧体発話を質的に分析し、その問題点を考察することとした。

5. 結果と考察

5.1. RQ1: アップシフトの生起頻度

表1に結果を示す。アップシフトの生起頻度では、学習者のアップシフトは総発話文数851のうち、14.9%である127のアップシフトが生起し、学習者全員にアップシフトが観察された。一方、日本語母語話者は、総発話文数1081のうち、アップシフトは0.6%にあたる7回で、3名に見られた。このことから、母語話者と比べると、学習者のほうがアップシフトの頻度が高いことがわかる。

表1 アップシフトの生起頻度

	学習者	母語話者
M1	56(21.4%) / 262	3(1.0%) / 304
M2	47(24.3%) / 193	2(1.1%) / 190
M3	16(7.9%) / 203	2(0.6%) / 336
M4	8(4.1%) / 193	0(0%) / 251
全体	127(14.9%) / 851	7(0.6%) / 1,081

*数値はアップシフトの回数 (%) / 総発話文数

5.2. RQ2: 無標/有標アップシフト

学習者のアップシフトを、無標アップシフトと有標アップシフトに分けると、母語場面にも見ら

れる無標アップシフトは、対人機能を表す一例のみが観察された。会話例2は、日本語母語話者のJ2と留学生のM2による会話で、この前に、奨学金をもらって大学で勉強しているという話がある。

【会話例2】 M=留学生、J=母語話者

- 01 M2 あー(えー)そっちはなんか、マレーシアの両親は、なんか、しっかり勉強して—hh、大変そうだ、ですけど。
- 02 J2 しっかり勉強してるからね、2人はねー。
- 03 M2 hhなんか、えーと、わたしたちは、なんかお金ないからhhhしっかり勉強hしますけど。
- 04 J2 すみません。
- 05 M2 な、えーhh。
- 06 J2 すみません。

[中略]

- 11 J2 いやーえらいなあ。
- 12 M2 hhいやーえらくない。
- 13 M2 あまりーえらくないですけど。
- 14 M2 (1.0) とんでもありませんhh。

11行目から14行目の会話部分に着目すると、11行目で、M2について、J2がほめると、M2は12行目で普通体を用いて否定しているが、13行目では丁寧体へシフトしている。このアップシフトは、「意見の提示」(劉, 2013)をするとき用いられる無標アップシフトと捉えることも一見可能であるが、M2は、1行目と3行目にも見られるように、文末詞「けど」が後接する場合に丁寧体を用いる傾向が高く、「ですけど」というひとかたまりのパターンとして覚え、発話している可能性があり、学習者特有のアップシフトであることが考えられる。これについては、5.3.で後述する。

では、次の場合はどうだろうか。14行目を見

ると、「とんでもありません」という発話があり、ここでもアップシフトが起きている。ここでは、約1秒の間を置いて、発話されており、また、笑いを含みながら述べられている。冗談のコミュニケーション手法を分析した大津（2007）によると、友人同士の会話では、冗談としてアップシフトがしばしば使われるとしている。そして、話し手は、聞き手に「冗談」であることを知らせる工夫として、「スタイルシフト前のポーズ」を挙げている。「とんでもありません」の発話の前に短いポーズがあり、笑いながら述べていることから、聞き手に「冗談」発話として提示していると言える。ただし、無標アップシフトと解釈が可能なものは、この一例のみで、あとは全て、有標アップシフトだった。

5.3. 有標アップシフトの要因①

この有標アップシフトの要因を探るために、まず、アップシフトがどのような形の丁寧体で現れていたか、その形態的特徴を見ていく。

学習者の丁寧体発話を形態別に見ていくと、次のような特徴が見られた。まず、「ですか・ますか」で発話される疑問文、「ですね」「ですけど」など文末詞を伴った終助詞文、聞き手の情報を受信したときに用いられる「そうです」「そうですか」といった「ソウ系発話」、質問への応答として用いられる「はい・いいえ」、フィラーなどが頻発し言いよどむ時に現れた丁寧体発話、それ以外の6種類である。右の数字は、学習者ごとの出現回数と合計を示す。なお、一つの発話に、複数の形が見られた場合は、複数回数えている。

表を見ると、丁寧体のほとんどが「疑問文」「終助詞文」「ソウ系」「はい・いいえ」といった特定の表現に使われている。詳細を会話例に示す。

表2 学習者の丁寧体発話の形態的特徴

形態	例	M1	M2	M3	M4	計
疑問文	M: 一人暮らしですか。 J: そうそうそう。	7	22	2	0	31
終助詞文 (ね, よ, けど等)	J: 新幹線な、たけえよ。 M: 高いですね。	6	17	0	1	24
ソウ系	J: おもしろいよーあれ。 M: お、そうですか。	12	9	3	0	24
はい/いいえ	J: 二階建て? M: はい。	3	0	11	2	16
言いよどみ	え、日本はなんか、え、 高速道路に、えーなんか、 期限がありますか。	12	10	0	1	23
その他	J: (お酒) 飲めない? M: 飲めないです。	18	0	0	4	22

【会話例3】

- 01 J 3 いつでもいくの?
→02 M 3 はい。
03 J 3 hhh
04 M 3 いつでもなんか、雨一雨の日だけ
なんか h (hhh)、いかないほうがいい。
05 J 3 あーそんな感じで (はい)、そう
なの?
→06 M 3 はい。
07 J 3 え、ふゆはない?
08 M 3 冬ない。
09 J 3 冬ない?
→10 M 3 はい。

M3は、留学生の中でもっともアップシフトが少なかった留学生で、アップシフトは8回のみであった。やり取りを見ると、J3の一連の質問に対し、すべて「はい」という丁寧体で応答している。

こうした「はい」「そうですか」といった応答時の発話で丁寧体が頻出することは、ホストファミリーとの会話における丁寧体使用を観察したCook (2008)でも報告されているが、より普通体使用の規範が働く友人同士の会話においても同様の傾向があることがわかった。

続いて、会話例4を示す。

【会話例4】

- 01 M 2 えーとー、なんか、レポートはもう書いたですか hh?
- 02 J 2 レポート、レポート。まだ書いてないね。
- 03 M 2 hh まだまだですね。
- 04 J 2 全然書いてなくてこないだ@@先生におこられたわ。
[中略]
- 10 J 2 出さない方が出したほうがね、成績よくなるから。
- 11 M 2 そうそうそう、なんか出さないならたぶん0点なるですよ。

M 2の発話の、1行目に疑問文があり、丁寧体にシフトしている。注目したいのは、ここで「書いた?」という普通体の疑問文ではなく、普通体に「ですか」が付いた形になっており、文法的には誤りとなっている点である。また、3行目と11行目には終助詞がどちらも丁寧体で話されており、11行目は、先述の例と同様に、「なるよね」にはならず、「なるですよ」 という誤文の形で丁寧体にシフトしている。

疑問文に関しては、上仲(2007)でも報告があり、普通体の場合はイントネーション操作が必要になるが、丁寧体では形態的に疑問文であることを示すことができるため、疑問文マーカーとして丁寧体が使われていたと考察されている。つまり、相手に質問を行うときに、普通体よりも丁寧体が先に想起され、使われやすいということである。

終助詞文も同様のことが考えられる。普通体の形に「ですね」といった丁寧体が付加されて用いられていたことから、それらが「です」とともにチャンクとして形成され、待遇意識とは関係なく、一つのパターンとして習得され、使用されている可能性がある。

5.4 有標アップシフトの要因②

一方で、有標アップシフトの中に、こうした日本語能力の不足によるものと解釈しにくいものも見られた。

【会話例5】

- 01 J 4 (新しいパンケーキ屋に)行ったことある?
- 02 M 4 いえ、行った。行きました。

会話例5では、J 4が、新しくできたお店に行ったことがあるかという質問への応答をし、M 4は、「行った」と一度普通体を用いてから、「行きました」という丁寧体に言い直している。ここでは、行ったことがあるか否かというシンプルな質問への応答であり、M 4に言い淀みも見られない。「行った」と一度言い切ってから丁寧体に言い直し、訂正をしているように見えるが、なぜ、ここで言い直しをしているのだろうか。

陳・川口(2013)では、友人との会話では、聞き手目当ての行為である、相手に情報要求する質問文で、丁寧体へのアップシフトが起きていたという報告がある。本研究でも、質問発話、質問に対する応答、「ね・よ」の終助詞といった、聞き手目当ての行為でアップシフトが多くなされていた。こうした聞き手目当ての行為では、相手の領域に踏み込み、相手のフェイスを侵害するおそれがある。つまり、留学生のアップシフトには、それを回避するために、「質問・依頼など聞き手目当ての発話では、丁寧体を使用することで、聞き手の領域に踏み込むことを回避する」という学習者独自の規範が働いた可能性が考えられる。このように、言語外的な要因によるアップシフトもあると考えられる。

6. 総合考察

本調査により、次の点が確認された。

・無標アップシフトは、冗談を示す対人機能が一例のみ観察された。

・アップシフトのほぼ全てが有標アップシフトであった。要因として、1)日本語能力の不足によるもの、2)相手のフェイスを侵害することを避けるという言語的要因、言語外的要因二つの可能性を考える必要があることがわかった。

この学習者特有のアップシフトは、どのようにして形成されるのだろうか。それには、教室談話が少なからず影響していると考えられる。現在の会話教育では、丁寧体が中心であり (Matsumoto & Okamoto, 2003)、教室で使われる主なスピーチスタイルは丁寧体であることが多い。そのため、丁寧体の形でひとかたまりの表現として覚えている可能性がある。

以上のことから、会話教育では、普通体によるインプット・アウトプットの機会を積極的に作る必要があると考えられる。アップシフトには、笑いなどの特別な反応を要求するなど、相手の「反応を強く引き出す技法」であり (千々岩, 2016)、これらを巧みに用いることで、自分の発話意図を効果的に相手に伝えることができる。状況に応じて、スタイル操作ができるような指導が行う必要があると考えられる。

7. 今後の課題

本発表では、留学生と友人の日本語母語話者との会話データから、留学生のアップシフトの実態を捉えることを目指したが、結果を裏付けるためには、フォローアップインタビューなどを用いて、留学生の丁寧体使用についての意識調査を行う必要があると考える。また、今回、学習者に見られた規範的なアップシフトは、一例しか見られなかったが、滞日歴や日本語レベルなどの異なる学習者を対象とした場合に、違った結果が得られる可能性がある。今後は、これらの点を考慮して、再検証をしたい。

付記

文字化に用いた記号

。 / 、	発話の終わり/切れ目
?	上昇音調
h	笑い
[発話の重なり
()	相手によるあいづち
{ }	筆者による補足

(参考文献)

1. 上仲淳 (2007) 「中国語を母語とする上級日本語学習者のスピーチレベルとシフトに関する研究」大阪大学大学院博士学位論文
2. 大津友美 (2007) 「会話における冗談のコミュニケーション特徴—スタイルシフトによる冗談の場合—」『社会言語科学』10号(1), 45-55.
3. 高橋美奈子・矢部弘子・本田明子 (2017) 「第三者言語接触場面におけるスピーチレベルシフトの機能—日本語学習者同士の自然談話の分析から—」『ことば』38号, 46-62.
4. 陳新・川口良 (2012) 「中国語を母語とする日本語上級学習者の文末スタイルシフトに関する一考察」『言語と文化』, 25, 70-100.
5. 千々岩宏晃 (2016) 「スピーチスタイルアップシフトの会話分析を用いた研究：日本語の雑談における反応要求の技法」『日本語・日本文化研究』26, 115-126.
6. 三牧陽子 (1993) 「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要』第1部門(人文科学)42(1): 39-51, 大阪教育大学.
7. 三牧陽子 (2013) 『ポライトネスの談話分析：初対面コミュニケーションの姿としくみ』くろしお出版.
8. 劉雅静 (2013) 「友人同士3者間会話におけるスピーチレベルシフトについて—上下関係のある親しい友人同士の会話データをもとに—」言語学論叢オンライン版第6号(通巻32号), 34-48.
9. Cook, H. M. (2008) *Socializing identities through speech style: learners of Japanese as a foreign language*, Bristol, United Kingdom: Multilingual Matters.
10. Cook, H. M. (2016) *Adult L2 learners' acquisition of style shift: The masu and plain forms*. In Minami, M. (eds.), *Handbook of Japanese Applied Linguistics*, 6, De Gruyter Mouton. 151-174.
11. Matsumoto, Y. & Okamoto, S. (2003) "The Construction of the Japanese Language and Culture in Teaching Japanese as a Foreign Language", *Japanese Language and Literature* (37), 27-48.